

ラジオ「福音の光」説教
「弱さの内に注がれる神の恵み」 1
コリントの信徒への手紙第二 4 章 7～18 節

姫路あけぼの教会牧師 廣田守男

私たちの兵庫キリスト教障害者共励会の修養会も、四障伝と同じ第 32 回を、例年 10 月に行うのですが、今年は私が居ないため九月に開催したところです。

私は、昨日からここに宿泊していて、今朝は岩崎内科で透析を受けてきました。私は、20 年前に人工透析を始めたのですが、どこへ行っても人工透析をしないと死んでしまいます。岩崎内科の先生や看護婦さんから「水分の取り過ぎだ」と、厳しい注意を受けました。主治医から注意されないことも、主治医でないからこそ、私のためを思って、あえて注意して下さった愛を深く覚えました。神様は、私たち一人ひとりを育てて下さって、イエス様を信じている人、信じていない人に関わりなく、色々な人を通して、愛の故に語りかけて下さっていることを、深く覚えさせられます。

私が導かれてゆく背景に色々な方との出会いがありました。その中でも障害者の方との出会いは、何回かあったのですが、本当の意味で係わりを持つようになったのは、かなり後でした。それまでは、小児麻痺であったろうと思われる方が、座敷牢に入れられて生活していた家へ、友人と共に行った時に、その障害者の方が話しかけてくるのに、無視していたことが多かった、冷ややかな人間でありました。

姫路福音教会で牧師になる前に 6 年間、献身奉仕していた時に、視覚障害の方、身体障害の方、時々発作を起こす方、聴覚障害の方との出会いが与えられたのですが、手話を習おうともせず、また身体障害者の方から、「障害を理解せず、マイペースでやっている」と、注意されたことを、ここに告白するものであります。

私が障害者との係わりを余儀なくされたのは、呉アライアンスの本庄ハイツキリスト教会で、協力牧師として奉仕していた時に、岡田富さんと言われる男性の視覚障害者の方から送り迎えをしてほしいと言われた時です。最初は私が送迎をしていたのですが、後で信徒の方がして下さいようになったのですが、その時岡田さんから視覚障害者に接する時の注意事項を教えて下さったのです。私が以前に接した障害者の方々に、如何に負担を強いたことかを深く覚えさせられたのであります。岡田さんは教会の大掃除では積極的に窓ガラス拭きを毎年して下さいたり、司会の奉仕や祈り会などにも出席して下さい、私は目が開かれるような思いがしました。

私は、呉にいた時、慢性腎不全を患い、一年半後に透析を受けねばならなくなったのです。透析は、最近は良く認知されてきましたが、腎臓の機能が悪くなり、身体の毒素が尿として排出されなくなるので、尿毒症となって、毒が身体全体に回って死に至るので、汚い血液を体外の人工腎臓の機械で透析して、清くした血液を、もう一度

体内に戻すのです。一回の透析に4～5時間かかり、人によって違うのですが、週に2～3回受けなければならないのです。透析は、死ぬまで受けねばならないので、そうなる前に食事療法など、随分と気をつけて闘病したのですが、悪くなる時は急速に悪くなって、透析を受けねばならなくなってしまうしました。

今から40数年前の高校生の時、無知と過労から、亜急性腎炎という腎炎よりも悪く重い腎炎になり、全身が腫れて命も危ぶまれる程になり、赤十字病院に1年程入院しました。入院中の1958年2月のある日、谷村梅之助兄が、母にでも頼まれたのか尋ねてきて下さいました。母も姉もクリスチャンで、私をよく教会へ連れて行ってくれましたが、聖書も読んだことがない不信仰者でした。谷村兄は結核で入院されていたのですが、私と出会う五年ほど前に親戚の方に連れられて教会に導かれた方で、それまで病気で大変苦しめられたそうです。谷村兄は哀歌3章22～23節にある「私たちが滅び失せなかったのは、主の恵みによる。主の憐れみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。」と言われるように、イエス様の十字架による救いを信じ、罪を清めて下さる聖化を経験されたのです。谷村兄が、私に個人伝道して下さい、私の心は開かれましてイースターに洗礼を受け、神様の語りかけというか、憐れみによる導きがあったことを深く覚えさせられたのあります。結局、私は慢性腎炎となり退院し、復学、献身、牧師という道を辿りました。神学生時代に更に状態が悪化したので、医師に診てもらいました。その医師は、クリスチャンでしたので、牧師は過労になりやすいから、別の道に行った方が良くはないかと、再々注意を受けましたが、牧師の道を歩きました。神様の御用をしているのだから、神様が守って下さり、大丈夫だという思いを持っていました。その思いは、間違った過信に陥っていたことを、神様の前に懺悔させられた訳です。

今読んで頂きました聖書の箇所は、消極的否定的見解と積極的肯定的見解があることを改めて深く覚えさせられたのであります。消極的に自分を卑下し否定し、自分が情けない者だという現実と、そんな私たちを受け入れて下さって、新しい生きる力を与えられ、積極的に肯定的な生き方に変えて下さるといふ恵みが、注がれているといふことを、改めて深く覚えさせられたのであります。私や皆様方の現実を振り返ってみましても、私たちは土の塵から造られた人で、生きよと神様の息を吹き入れられた、そして人間は生きた者となった、と創世記に記されています。本来は壊れやすい土の器です。私は高校時代に亜急性腎炎になりましたが、それ以前は病氣らしい病氣もせず、健康を損ねるとは夢にも思わなかった。過信をしていたので、無理に無理を重ねて、入院しなければならなくなり、家族や友人を離れ、ひとりぼっちになり、どん底に落ち込み、自分は精神的にも強いんだと思っていたのに、何ともろいものだなあ、と深く覚えさせられました。神様の前に悔い改めて、枕元に置いてあった聖書を読むようになり、イエス様を信じるように導かれました。本当に土の器でした。しかし、だから駄目なのではないのです。否定的な土の器だという現実は事実なのです。

が、そんな中に宝を持っている。イエス・キリストを信じる信仰、イエス・キリストの福音、十字架による救いと潔めとか。完全なイエス様によって与えられる、罪赦された喜びと生きる力と勇気です。それらすべてが、宝として福音という言葉の中に現されていることを思うのです。この限られた聖書の中で、如何に消極的否定的見解が少なく、積極的肯定的見解が多いかを知らされました。

人間は誰でも身体的に衰え、また限界を知らされるわけですから、障害があろうが無かろうが、そうした自分の現実を見つめて失望したり悲しんだり傷んだりする場合が、多いのではないかと思います。しかし、その傍ら、私たちの内から力となって下さる計り知れない、即ち失望にも絶望にも陥らないで、新しい力と勇気を与えられて、歩いていくのです。それが神様から与えられる恵みなのだと、明らかにしているのです。私たちは生きていく上で、〃誰でも四方八方から苦しみを受ける、途方に暮れる。迫害される。死ぬような思いをすることがある。外側の人は衰える。艱難がある〃そうした現実、私たちは死んでしまいたいような思いに陥り、神も仏もあるものか、と言う思いに陥れられる場合もあります。人間的に絶望して、もうこれ以上駄目だと思ふ所を、誰でも通されるわけですから。しかし神様の御力は、私たちに計り知れない力を与えて〃窮することはありません。行き詰まることはありません。見捨てられることはありません。滅びません。イエスの命がこの身に明らかにされる。いのちがあなたがたに働く。信仰の霊を持っている。信じているが故に語る。主イエスをよみがえらせた方、私たちを主イエスと共によみがえらせる。あなたがたと一緒に御前に立たせて下さる。すべてのことはあなたがたのため。恵みがますます多くの人に及び、感謝に満ちあふれ、神の栄光が現れる。内なる人が日々新たにされています。計り知れない、重い永遠の栄光をもたらす。見えないものは何時までも続く。〃というのであります。

私の恩師である末永牧師のご夫人で牧師であられた方が、直腸がんで本当に辛い中を通られたと思うのですが、召されました。神様は必ず癒して下さるという信仰を持って、静養しながら御用をなさっていたのです。その時、末永牧師のクリスチャンであるお兄さんから〃今の時の重い艱難は働いて、永遠の重い栄光をもたらす〃と言う電報が来たそうです。苦しんでいるのを見るに見かねて送って下さったのです。現実には確かに重い艱難であるかも知れないが、神様が与えて下さる永遠の重い栄光から見たならば、軽いものである、とパウロは言っております。人間は、余りにも重い現実の艱難、苦しみ、辛さの故に重いものと感じるのですが、イエス様の十字架の重さに比べれば、軽いものなのです。しかも永遠の重い栄光に繋がっていくんだと言うことを、語っておられたと思うのです。

この間、神戸栄光教会の相浦和生牧師が、共励会の集会で語って頂いた〃弱さは誇るべきことなのか〃と言う中で、弱さは誇るべきことではないのではないか、と言われていました。障害そのものは痛みなんだ、苦しみであり悲しみであり、辛いことな

のだ。それを認めなければならない。しかし、そのところから新しい展開が、イエス・キリストの十字架のいさおしと復活の力によって与えられていくのだ。痛み、苦しみ、悩み、悲しみがあるんだけど、それ以上に素晴らしい神様の恵みに生かされているという、喜びと感謝が語られていました。コリント人への手紙第一の1章25～31節を読んでみますと「神様の選び」ということが出て来ます。その中に、世の無学な者、世の無きに等しい者、身分の卑しい者、見下げられている者を、神様は選ばれた、とあります。私自身、六人兄弟の末っ子で上の方が良く出来て、下になるほど出来が悪く、多少劣等感を持っていました。私たちは、人と比較して、自分は何と情けない者なんだろうかと、消極的で否定的になると思うんです。ところが、そういう者を神様は召して下さり、招いて選んで下さった。そして、イエス様と共に歩く生活に導いて下さる。イエス様は、私たちに知恵を与えて下さり、また罪を赦し、正しい者として罪を清めて下さる。私たちは、イエス様に倣い、従っていくと、十字架によって全き救いが与えられるという、恵みに導かれているのだと、改めて覚えさせられるのです。

私は、何と弱い者で足りない者かと思いながら、開拓伝道をさせて頂いていますけれども、なかなか実らない現実の中で、何と乏しい者であろうかという思いに囚われて、消極的になり、自分を否定し、周りを否定するという風に陥ってしまいがちです。しかし、それ以上に、神様の恵みと祝福が約束されている、そんな恵みの中に生かされているのだ、ともう一度聖書を通して明らかにされていることを覚えるのであります。

私たちの内にある宝は、福音、神の御力、イエス・キリストを信じて救われ、神と共に歩み恵みです。これがどんなに素晴らしいものであるか。自分の努力や熱心さで得られたものでなく、悔い改めと信仰によって与えられた恵みなのです。これをもっともっと大事にして、否定的な消極的な見方でなくて、もっと目を見張って、積極的に神様を崇め、賛美し、褒め称え、神様の恵みと祝福を、証しする生涯を送らせて頂きたいと願って止まない次第です。ニューヨーク大学リハビリテーション研究所の壁にある「病者の祈り」を読んで終わります。

病者の祈り

大事をなそうとして、力を与えてほしいと祈ったのに、慎み深く従順であるようにと、弱さを授かった。

より偉大なことが出来るようにと健康を求めたのに、より良きことが出来るようにと病弱を与えられた。

幸せになろうと富を求めたのに、賢明であるようにと貧困を授かった。

世の人々の賞賛を得ようとして権力を求めたのに、神の前にひざまずくようにと弱さを授かった。

求めたものは一つとして与えられなかったが、願いはすべて聞き届けられた。
神の意に添わぬものであるにもかかわらず、心の中の言い表せない祈りはすべてかなえられた。
私はあらゆる人の中で、最も祝福されたのだ。